琉球文学序説

嘉味田宗栄著

至言社

琉球文学序説

© 1979

7200円

1091-792451-7612

1979年7月1日　第一刷発行

著　者　嘉味田宗栄

発行者　救仁郷　建

発行所　至言社
東京都文京区本郷2－24－4

発売元　株式会社　ぺりかん社
東京都文京区本郷2－24－4
振替・東京0－48881／電話03(814)8515

印刷・三栄印刷／製本・古賀製本

序文

仲宗根政善

喜味田宗栄氏は、国文学の専攻だが、時枝誠記博士にもついて学び、国語学の研究も深く、氏の学問領域は、広く国語学・国文学にわたっている。氏はことばの本質に対する理解が深く、従来ややもすると、文学の内質が、ことばのほかにあるかのように考えられたあやまりを正し、文学はことばの通じ合いの一つのあり方であるという見方をとっている。これまで出された氏のすぐれた論は、多くここから発想しているように思われる。

氏の研究は、上代文学研究から次第に琉球文学研究にうつって来ているように見受けられるが、万葉集の東歌の研究に早くから没頭していたところからすると、あるいは最初から琉球文学研究をめざして、ちゃくちゃくと基礎固めをしていたのかも知れない。次第に琉球文学の研究を深め、大学でも講義し、学生の興味をそそり、祖先の残した文学への関心を高めた。

氏が俗事にわずらわされることなく、ひたむきに研究に専念しているのをつねづね羨ましくも思い敬服していた。積み上げられて行く研究の成果が、必ずや素晴しいものになって公にされるであろうと期待していたのは私ばかりではなかったであろう。はたして今度、琉球文学を総括した七〇〇頁にちかいぼう大な研究、『琉球文学序説』を出された。一つには学生の参考に、一つには研究者、愛好者のためだという。琉球文学研究のいしずえがどっしりすえられた感がする。

琉球文学の研究は、明治の中頃、田島利三郎が琉球語研究資料をあつめた時に始まり、その研究は伊波普猷先

生に引きつがれた。先生はおもろ研究に生涯をささげ、偉大な業績を残された。おもろ研究はさらに仲原善忠先生にひきつがれて発展し、琉球文学研究はおもろ研究を中心にして来ている。その他にも、宮良当壮・金城朝永・奥里将建・世礼国男・喜舎場永珣・島袋盛敏・稲村賢敷・小野重朗等の諸先輩の部分的な研究がある。しかし琉球文学全体を真正面にすえて研究にとっくもうとする姿勢はまだ見られなかった。

喜味田氏は、琉球文学の形態を、誦詠・古謡・おもろ・あやご・琉球歌謡・組踊に分類し、あらゆる形態をもうらして、琉球文学の全貌を明らかにしようと熱情を燃やしている。各形態にわたり、豊富な資料をあげ、従来の説を批判しながら、解説を加えて、綜合し体系立ててある。諸説を一覧するにも便だし、氏の説に非常に啓発される。従来の研究を集大成したとも言えよう。私は読んで研究意欲をかりたてられた。方言採集のかたわら、島島で聞いたいんめつ寸前にある多くのうたにも一層の愛情をおぼえるようになった。

『琉球文学序説』によって、琉球文学研究の将来が急に開けたように感じられる。琉球文学のいろいろの形態が、どのように発生し展開したか、またそれを生み出した社会や風土との関係も、もっと明らかになろうし、琉球文学を一貫して流れている精神や、我々の祖先の生き方も究明され、新しい文化の創造に大きく寄与するにちがいないと期待されるからである。

琉球文学研究の機運がようやく高まりつつある時、このような研究が世に出たことは、同僚の一人として喜びに堪えない。

一九六六年五月二十日

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

序文　仲宗根政善……I
はじめに……一
第一章　形態……一一
一、誦詠……一四
1　みせせる……一四
2　おたかべ……二九
3　御拝つづ……四八
4　よんごと……五〇
二、古謡……七四
1　くわいにや……七五
2　ゆんた……一〇六
3　じらば……一五二
4　あやう……一七〇
三、おもろ……一八三
四、あやご……二七一
1　にいり……二七二

2 あやご……三二九
五、琉球歌謡……三六三
1 沖縄の歌……三六三
2 大島の歌……四三四
3 宮古の歌……四四五
4 八重山の歌……四六七
六、組　踊……四九三
1 概　観……四九三
2 手水の縁……五〇七
第二章　日本文学の影響……五五三
第三章　琉球文学とことば……五八三
あとがき……六四七
再版あとがき……六四八
索　引……六五一
跋　岡本恵徳……六八五
解説　玉城政美……六八九

はじめに

ここでいう琉球文学は、琉球方言文学のことであり、現代沖縄でおこなわれる地方文学をさすのではない。地域は、沖縄・宮古・八重山・奄美大島などの島々にわたり、誦詠・おもろ・古謡（おもろを除く）・琉球歌謡・組踊・狂言などからできている。ことばも、今日の話しことばと異なる、いわば琉球文語であり、受容者は、これらの諸地域にわたる文語に精通することが要求される。

琉球方言文学も、ことばによる通じあいの一つのあり方であるので、まず、ことばについての考えかた、いわゆる文学をどうみるかということ、文学はまたどのようにうけとるのがのぞましいか、その文学の中の琉球方言・文学は、どう研究し、どう理解すべきか、といったことにつき、ひとわたり考えておく必要がある。

さしあたり、ことばの問題がある。これまで、いろいろ考えられて来たなかに、おも立った二つの行きかたがある。微視的な見かたと巨視的なそれとである。ことばを、その話された結果の音声と意味との構成にしぼって、厳密なこまかな分析によって、音韻・意味・語法を体系的に記述するやりかたなどが、それである。この方法は、ことばの方処的な異同のたしかめかたや位置づけ、ことに比較研究に絶大の功績をあげているだけでなくことばの異同のこまかな分析から、あらゆる地域のことばを、体系的に、しらみつぶしに調べあげることにより

ついに、ことばの素性、つまり歴史を見きわめるうえでも、おそるべきつよみが予想され、こんにち、日本のことばの学問の主流を行く形勢をみせている。しかし、この微視的な見かたにも可能と限界があって、人間が、その生命を維持発展させるための通じあいを、全体としてとらえるということ、通じあいのありかたを生きたものとして見ようとするがわは、いきおいお留守になりがちなので、ここにことばを、巨視的に見きわめて行こうという考えかたが出てきたのである。

このような、ことばの見かたによると、まず、通じあいの主となる人間が、はっきりと、ことばのことで正面にすえられる。ことばを、その話された結果からすれば、音声と意味との構成体であることはたしかであるが、もっと、もとに立ちかえり、視野をひろげて通じあいという、生きるための人間のはたらき、心のはたらきとして、ありのままにとらえようとすると、かならず、そのような行為としてのことばの成りたつ条件と、人間が何かについて考え感じ判断し、これを、発音し又は書くまでの、心のはたらく過程が、内省されなければ、ならないのである。

いきて働いていることばには、かならず、通じあいにされることがらと、通じあいをする人間と、通じあいを決定する条件と、この三つ、やや凝った言いかたをすれば、主体、場面、素材の三つの条件がなければならない。私たちの通じあいのことばは、つねにこの三つの条件に支えられて、はじめて成立するのだと、この巨視的な立場の人はいう。しかし、もっと重要なことは、このような条件にささえられて、人間が、何をどうとらえ（意味作用）、どう発音し（音声表出し）、又は、どう文字で表記するか（文字表出するか）、又、音声又は文字を媒介

として、相手が何をどうとらえたかを知るはたらき、つまり受けとる心のはたらく過程が内省されなければならないということなのである。

この成立条件と過程構造に着目したため国語教育や、文学の理論に、着実な視点をもたらしたのである。さきの微視的なことばの見かた、つまり静的なことばのとらえかたからは、しぜん、ことばは、すべて音声と意味との構成体だから、文学は、そのことばに宿る美として説明されがちで、どうも、比喩的な、間接的な見方になる。ところで、あとの方の巨視的な立場からは、文学を何と説明するかといえば、こうである。文学とは、当の作者が、ある素材をきっかけとし、ある、歴史的・社会的または、民俗的、或はその当座の、と、いろいろな場面に支えられて、意味作用（文学的意味作用）をし、その意味作用に即応して音声表出し、又は、文字表出し、理解者は、この過程を逆にたどって作者の心意に近づく、というのである。

文学が、このような成立条件と過程構造をもつということは、日本での、これまでの、文学研究のしかたのうつりかわりからも、察しられるのである。文献学的な研究にあけくれるということについては、その地味なしごとによって、文学作品を確実に綿密にうけとる素地をつくるといった偉大な功績を忘れることはできないが、書誌学風になって、かんじんな文学を忘れてしまった。そこで、文芸学的研究がおこって、はじめて日本文学の文芸性が学問として体系づけられたが、この方はまた、文学のことばの成立条件をるすにして、潔癖に文芸性を抽象していったために、文学に生きた主体の具体性が乏しくなった。すると、俗に歴史社会学派と、ひと頃言われた傾向の人々があらわれ、文芸学派の目のとどかなかった、歴史社会的場面をほりさげて、文学をより具体的に

とらえるようになった。

これはまた、文芸学派の盲点をつくことによって威勢よく多くの新しい成果をつぎつぎと見せてくれた。にもかかわらず、歴史社会的場面に集中することから、ややもすると、文学の内質そのものに背をむけ、目のあらい史上の文献から、不自然に作品に意味づけるような公式主義が顕著になった。そこにあらわれたのが、民俗学派とよばれた人々で、目のあらい歴史的事実ではとどかず、もらしがちな、民俗、信仰の具体的調査から、古代人の心意にせまるような、綿密で、説得力のゆたかなやり方で文学をとらえて、歴史社会学派をおどろかせたものである。ただいままでは、これらの異った立場の人々が、相互批判や自省から歩みよりつつ、なお、もちまえの傾向を強力にみがきあげようとしている。この学派の消長をどう解釈したらよいか。

すくなくとも、文字表出の段階にきた文学表現で、文献学的研究により、原典原作品がほんものか、ほんものに最もちかいという見とおしをつけたり、これを解読するためのことばの基本的な橋渡しができていなくては、文学の研究や受容は、はじまらない。このいみで、どのようなゆきすぎや否定面をあらわにしようと、重大な作業であることは、否めない。

文芸学的研究がおこらなかったら、日本文学はいつまでも古文書やことばいじり、国民精神をたずねる手段にされ、独りあるきはできなかったにちがいない。歴史社会学的研究が文芸学の地べたをはなれがちなゆきすぎを見とどけて警告をあたえ、文学的通じあいをする人間の情意のよってくるところを具体的にし、しみじみと文学する道を示さなかったら、私たちは、いつまでも抽象した美としての文学を遊ぶことになったにちがいない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

民俗学的研究が、そのすばらしい直観力と細かな忍耐づよい実地踏査によって、古代人の真意にじかに迫ってゆくやりかたを教えてくれなかったら、私たちは、ややもすれば目のあらい網で強引にさかなを威勢よくおっかけまわすような徒労におちいったり、時空をこえて手近にちらちらする古人の微妙な表情を見おとすことになったかも知れないのである。ちかごろ、風土がいかに作者の意味作用にはたらきかけて、それが微妙なことばを綾なしているかを詳細にしらべあげて、私たちをよろこばせた人々があらわれてきた。

日本文学の研究のしかた、したがってうけとりかたが、こうも、いろいろな顔つきをしてあらわれた。しかも、同時に姿をみせず、継起的に登場してきた。それはなぜだろう。人間はいかなる天才でも、時代をこえて、事象をまんべんなく見とおすことのできない運命にある。だから、今日では誰にでも見えすいて馬鹿馬鹿しい第二次大戦もあえてしたのである。文献学派は自分の行き方のよさは知っていても、そんなやりかたが、適当な条件をこえると、古文書いじりになりさがることにまで気づくことはできなかった。文芸学派は、あしもとが地べたから離れてゆくことをかねて知るよしもなかった。歴史社会学派は、せっかくの文学に背をむけて歴史学の家来になることに気付かなかった。民俗学派は、なにもかも十把ひとからげに遠いむかしにひきずりこむくせを出そうとは思いもよらなかった。風土派（といっておこう）が、写真屋にならねばさいわいである。すべて、肯定面には否定面がついてまわっている。否定面が肯定面と同時に顔をのぞかせてくれれば世話はない。悲しいことに、条件が徐々にやってきて、正面にたちはだかった否定面には、もう自分では手の出しようがないのである。

もとにもどろう。これらの学派の消長をどう解釈したらよいか。思うに、これは、文学そのものの本質が、必

然的にそうさせたらしいのである。それぞれの学派のはじめて登場した段階では、いずれも自己の行きかたを絶対だと、すくなくとも信じていたのに、じつは、意外なところに盲点がひかえていたのである。それは、文学が、さきにのべたように、三つの成立条件、即ち、主体（表現主体・理解主体）、素材（作品）、場面（歴史社会的場面・民俗的場面・風土的場面・表現当座の心意にはたらく場面）によってできており、素材に対する意味作用・音声表出、又は文字表出の過程構造をもつという事実に深くかかわって、現象したことを物語るものとみるべきである。

文献的作業は、このような成立条件と過程構造をもつ文学の全体からすれば、その基礎づけにすぎない。文芸学的な厳密な潔癖な、美的理念の体系の樹立も、素材に対する美的文学的意味作用の追求に集中されていたにすぎない。歴史社会的研究・民俗学的研究・さらに風土の面の研究は、文学の成立条件のうちの場面を具体的にしたにすぎない。いまになってからは、かんたんに言えるけれども、ほんとにそうなのである。これは、文学にとっては、いわば、成立条件の一つであり、文学の内部過程構造の一つであったのである。

具体的な文学は、いつの世でも、いかなる処でも、右の諸学派のやりかたを要求するのである。いくら綿密を期しても、具体的な文学を、全体として一挙にとらえることはできない。否定面にかならずぶっつかり、つぎの学派にとってかわられ、そのやりかたも、つぎつぎと否定面をばくろして、きたるべき新しい傾向のとらえかたにかわることになる。これは、文学の本質としてそなえる条件や過程が、歴史的に時を追うて自覚され強調されて今日に立ち至ったと見るのが穏当のようである。

近代文学や現代文学で、音楽性が否定されたり、視覚的イメージが強調されたり、詩において文字表出に意匠

をこらすといったことが、時を前後して現象するのも、じつは、三つの成立条件に支えられて表現・理解される文学の、内部過程構造たる、意味作用、音声表出、文字表出の、いずれかの過程が、ある時点で、ある条件からの必然的な要求から、そこだけを、とくにふくらまされて強調され追求されたのであって、このときも、たてまえとしての、文学の三つの成立条件と三つの過程構造の不離なかかわりあいにおいて見なければ、またまた、いつの間にか、音楽が独走し、イデオロギーが独走し、文字のいたずらが、はじまることを覚悟すべきであろう。

したがって、これらの成立条件や過程構造のいずれをとくに、ふくらませて強調すべきかは、当の作品が私たちに要求するはずである。作品によっては、その作者と、作者の立つ時所や、表現の特異性により、或は、美的理念を、或は、音声表出や文字表出を、或は主体としての作家研究の綿密さや客観性を、或は、古代人の習俗による心意の今日との相異を、或は歴史社会をうきぼりすることを、或は風土の調査を、とくにふくらませてとりあげるのである。

文学そのもの、作品そのものを、じかにうけとるという、文学としての通じあいに切実にかかわるかぎり、これらの成立条件や過程構造をおっかけることは、いくら強調してもすぎることはない。文献的研究も、このような意味でいえば、作品の理解、その文芸性の把握のしかたに反省を加え、たえず新しい役割をはたすことはいうまでもない。現代文学では、文献的作業につながるものとしては、誤植やとじあやまり、出版年次、発売禁止、盗作、模倣などの検討となるが、古典となるにしたがい、作業の重要性が加わる、ということなど今さら言うまでもなかろう。

琉球方言文学を調べて行くにも、このような、文学一般の見かたをたどっておくことからはじめるのが適当だ

と思われる。

琉球方言文学でも、その成立条件としての表現主体と理解主体、琉球において成立した「みせせる」「おたかべ」「おもろ」「琉球歌謡」その他の表現形態をとった文学的表現（素材）さらにそれらの表現形態をとった文学的表現を成立させた条件としての、歴史社会的・民俗的・風土的場面をかんがえることができる。それに、いろいろな表現の場に制約され、即応した発想（意味作用）、音声表出、文字表出（口誦文学が記録されて以後）の諸過程が想定される。例えば、発想から言えば、神の託宣としてか、神への祝詞（オタカベ）とするか、「おもろ」の場合とするかにより、音声表出の想定も、誦詠したか謡われたか、身ぶりを伴って謡われたか、荘重か軽快か、リズミカルか否かの想定がともなうのである。文字表出においても例外ではない。琉歌その他の文字表出とことなり、「おもろ」の古い写本の句読点の施しかたは、かならずしも意味的に文節単位にされていないで、意味の連続を遮断して、いきのきれ目で読点を付したのがある。これらの文字表出についての、今日の常識のとどかない現象を見きわめることも、あらためて意識させられるのである。文学の成立条件と過程構造の本質的なありかたは、琉球方言文学にもついてまわる。このたてまえを無視して、琉球方言文学の研究にかかることはできないのである。

ところで、琉球方言文学の研究の歴史は、さきにあげた日本文学の諸学派による徹底した追求と、傾向の変遷をへてきたのにくらべると、ほんの草分けの現状にあるのである。明治三〇年代のはじめごろから、田島利三郎

氏によってはじめられた「おもろ研究」は、その弟子の伊波普猷氏によって、一部が解明され、戦後仲原善忠氏によって、やっと手頃のテキストと索引が出ようとしている。「新釈」では、場面として、歴史社会的場面・民俗的場面・風土的場面の掘りさげは、比類を絶する到達を示しているのに、ことばの方では、つっこみが足りず、極言すれば未詳語だらけである。おもろの古い辞書と言われる「混効験集」は舌足らずで語源にもふれていず、あれでは、うわっすべりの口訳の手がかりを引き出すにも、こちらがいろいろ忖度せねばならない。むしろ、伊波普猷氏が、散発的に書かれた、琉球古語の言語学的探究や、「琉球戯曲辞典」のつっこんだ語釈の方が、例証に富んでいる。

山内盛熹、伊波普猷両氏の「南島八重垣」、真境名安興氏の「琉歌歌詞解釈」などの語釈の辞書以上のものがいまだに琉球文学における文献学的研究としてあらわれていないのである。島袋盛敏氏の「琉歌大観」は、あの粗い注釈をぬきにさえすれば、テキストとして、最高のもので、見里朝慶氏の数年来「沖縄文化」に連載しておられる詳細をきわめた解説の完成と相まって、琉球方言文学中、目立った成果として時代を画すると思われる。ところが、さきにも述べたように、「おもろ」も仲原氏の廉価なテキストの出現ではじめて、一部の人の手から、無名の多くの研究者の手にわたり、研究もこれからはじまると言えるし、「未詳語」といわず、おもろことばの総ざらいの検討、その語法、語源的な一面の考察だけでも、当分の手ごたえのある、価ゆたかなしごととなるのである。組踊りの文学性や、ことばは、琉歌と隣りあっているのであまり問題にはならないとしても、これらとても、語源的な探究は、ほとんど留守になっている。宮古の長詩形神歌の「にいり」が、稲村賢敷氏によ

って紹介されたが、文学としての研究が課題とされている。八重山古謡が、喜舎場永珣、宮良当壮、瀬名波長宣の諸氏によって調べあげられているが、ことばが、つっこんで問題になったとは言えないのである。

その他はおして知るべきである。したがってゆきすぎと言われるほどの文献学的、文芸学的、歴史社会学的、民俗学的研究が、琉球方言文学には、まだ、一度もおこったためしがないのである。私たち、琉球方言文学の研究者は、この事情を、まず、はっきりわきまえておくべきである。無反省に、本土の日本文学研究者の尻馬にのって、見当はずれなやりかたを、琉球方言文学に強引におこなうべきではないと思われる。

いまひとつ、琉球方言文学の研究で、ぜひ通らねばならぬ道は、さきの微視的言語観にたつ、ことばの厳密な分析研究ということである。方言文学の理解主体は、今日、たてまえとして、標準日本語を伝達の手段としている。標準語と琉球方言、ことに琉球文学の表現となっている琉球文語とのかかわりを充分に納得し、語感の微妙なあらわれをも細心にとらえることが要求されるのである。

それには、ことばの音声表出を手がかりに、意味作用の対応にまでせまるべきである。これを可能にするには、巨視的な言語観の、おおづかみな見通しだけで無理おしをするのでなく、やまとことばと、琉球文語との微細な異同を見きわめなければならない。

巨視的な言語観による文学全体の見とおしと、微視的な言語観による細密な比較研究とは、両々相まって、琉球方言文学に近づき、古代人の心意にせまることができるのである。

これについては、既発表の雑誌・紀要の私の論文をもとに、他に章を設けてのべてみたいと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com